

短 報

キバナオトメアゼナ小笠原に帰化 (山崎 敬)

Takasi YAMAZAKI: *Bacopa procumbens* (Mill.) Greenm. Naturalized in the Bonin Islands

1980年頃、小笠原在住の延島冬生氏が父島で、ゴマノハグサ科のミゾホオズキに似た、黄色い花の咲く草を採集している。標本があまりよくなかったのをそのままにしていたが、1998年に邑田 仁氏をとおして延島氏の採集した標本を再び入手したのでここに報告する(図1)。これはウキアゼナと同じオトメアゼナ属のもので、*Bacopa procumbens* (Mill.) Greenm. である。熱帯アメリカ原産で、ミクロネシア、マレーシア、インドなど東南

アジアの熱帯に広く帰化している。小笠原のものは以前駐留していたアメリカ軍が物資と共にグアム島からもたらしたのではないかと思う。渡辺清彦氏(1969)はこれにアメリカシソクサの和名を付けている。しかしシソクサ属とはなんの関係もないので、キバナオトメアゼナの和名を新称したい。

***Bacopa procumbens* (Miller) Greenm.** in Field Columb. Mus. Bot. ser. 2: 261 (1907); Backer & Backhuizen, Fl. Java 2: 507 (1965); B.



Fig. 1. *Bacopa procumbens* (Miller) Greenm. from the Bonin Islands.

C. Stone in *Micronesica* 6: 523 (1970)——
Bacopa dianthera (SW.) Descole & Borsini:
Corner & Watanabe, Ill. Guide Trop. Pl.: 797,
fig. (1969).

Hab. Isls. Bonin, Chichizima, Okumura (F.

Nobeshima, March 30, 1998, TI).

This species is a newly naturalized plant in
the Bonin Islands.

(東京都中野区 [redacted])

新帰化植物、オオヤナギアザミ (新称) 福島県いわき市から見つかる (門田裕一)

Yuichi KADOTA: *Cirsium hupehense* Pamp. Newly Naturalized in Iwaki, Central Japan

1997年11月、福島県いわき市で、アザミ属ヤナギアザミ節 *Cirsium* sect. *Spanioptilon* (Less.) C. Shih に所属する植物が見つかった (Fig. 1, A–D). この植物は頭花が大型で直立して開花し (Fig. 1, B), 総苞片が9列, 内総苞片および中総苞片の付属体が扇状に広がって大きく (Fig. 1, C), また高さが2 mと全体的に大型である点でヤナギアザミとは異なっている. 検討の結果, この植物は *Cirsium hupehense* Pamp. であることが明らかとなった. *Cirsium hupehense* は中国原産の植物で, 次のような経緯で福島県いわき市に帰化したかあるいは帰化しつつあるものと考えられる. この植物はこれまで日本には知られておらず, ヤナギアザミに似て大型であるところから, オオヤナギアザミと新称する.

日本産アザミ属植物の分類学的研究の一環として, 日本各地で現地調査を行うとともに, 現地には住する研究者に調査への協力を依頼してきた. そのような呼びかけに答えて現地調査を実施していただいた方々の中の, いわき市の深澤榮子氏と紺野七美子氏, 谷平雅子氏がいわき市川前町小久田 (おぎゅうだ) 林道でオオヤナギアザミを発見された. 1997年11月に発見されて以来1998年10月までの約1年間, 深澤氏らによって調査が実施されてきたが, 結局最初の発見地である小久田林道でしか見いだすことができなかった. しかもこれまでに発見されたのは最初の1個体のみである. さらにこの1個体は染色体観察と系統保存のために掘り取ったので, 現地にはもう存在しない可能性もある. 掘り取った個体は草刈りのため上部が失われており, 未開花の状態であった. しかし, 1997年にはこの個体は稔性があると思われる充実し

た瘦果をつけていたので, この個体のほかにも自生している可能性が高い.

オオヤナギアザミはいわき市川前町・小久田林道の側溝に生育していた. この林道は東京電力いわき営業所が管轄する林道で, 1995年に完成されたものである. 林道の法面にはコマツナギなどが生育しているが, これは同年に行われた外国産種子の吹き付けによるものであることが分かっている. 吹き付けに用いられた種子を輸入した業者によると, この種子は中国・北京近郊から採取されたものであるという. 問題のオオヤナギアザミの瘦果はこの吹き付け用の種子の中に混入していた可能性が高い. このことは, 同じ林道沿いにヒナヒゴタイ *Saussurea japonica* が採集されていることから裏付けられると考えられる. ヒナヒゴタイは日本では九州にしか知られていないが, 中国では東北地方から華南まで広く分布している (中国高等植物図鑑第4冊, 科学出版社, 北京, 1975).

1997年11月に採集された個体, E. Fukazawa 97005 (TNS) は高さ2 mを越えていた. 1998年10月に掘り取った根はヤナギアザミ節に特徴的な直根で (Fig. 1, D), 長さ20 cm, 最も太い箇所直径2 cmに達していた. 吹き付け用の種子の中にアザミの根が混入することは考えにくいので, 1995年に吹き付けられてから3年間で, 茎の高さ2 m, 根の長さ20 cm, 太さ2 cmに生育を遂げたことになる. これまでの状況証拠から, いわき市のオオヤナギアザミは帰化植物である可能性が極めて高いため, 帰化植物の定着と成長の速さの記録としてここに報告しておきたい.

オオヤナギアザミの染色体数は $2n = 28$ (Fig. 2) で, ヤナギアザミ *C. chinense* Gardn.